

中央アジア・シンポジウム  
～未来を見据えた中央アジアの今：チャンスとチャレンジ～  
中根一幸・外務大臣政務官 御挨拶

平成27年3月27日

## 1 はじめに

「中央アジア・シンポジウム」の開会に当たり、中央アジア各国及び米国、ロシアからのパネリストの皆様を、心から歓迎します。

御協力をいただいた日本側関係者の皆様にも、御礼申し上げます。

また本日は、このように、かくも多くの聴衆の皆様にお集まりいただきました。

本シンポジウム開催に当たっては、会場の収容人数の都合上、本日より2週間も前にやむなく参加募集が打ち切られたと聞いております。

共催者の一人として、これだけの多くの皆様に関心を持っていただいたことは、中央アジアが注目を集め始めていることの証左であり、大変うれしく思います。

## 2 日本の中央アジア外交

ここで日本の対中央アジア外交について簡単に触れたいと思います。

1990年代後半、当時の橋本龍太郎首相が「ユーラシア外交」を提唱しました。

これは、冷戦後に誕生した、ロシアのほか、中央アジアやコーカサスといったユーラシア大陸の国々との関係を、政治対話、経済協力、平和のための協力を通じて多面的に構築していこうという方針です。この下で日本は、中央アジア各国に対し、独立後の様々な困難を克服し、国造りを行っていく努力を支えてまいりました。

その後2004年には、当時の川口順子・外務大臣のイニシアティブにより、「中央アジア+日本」対話が開始されました。この対話は、中央アジアが開かれ、自立した地域として発展していくために、日本が触媒となって地域協力を促していこうというものです。この枠組みは、日本のような域外国と中央アジア各国との対話枠組みの嚆矢でありました。

2006年に麻生外務大臣が提示した「自由と繁栄の弧」も、中央アジア諸国の独立性を支援する日本の努力としては一貫したものでした。

昨年、「中央アジア+日本」対話は10周年を迎えました。昨年の外相会合では、岸田外務大臣の提案により、今後の10年を実践的な協力の場に変えていくことで一致し、現在、農業分野での協力などに着手しております。

以上のような方針や取組の下で、日本は、中央アジア地域の発展を一貫して支援してきました。

ここで、世界主要国の中央アジアへのODA累積額のグラフをご覧ください。1992年以降日本は、中央アジアへのODA供与額において米国に次いで累積第2位となっています。このように、独立後の困難な時期に、日本のODAは大きな役割を果たしてきました。

現在、独立後ほぼ四半世紀が経ち、中央アジア各国は、共通の基盤と課題を抱えつつも、それぞれ特色のある国家として、自立的な発展の道を歩み始めております。中央アジア地域を取り巻く国際情勢の急激な変化もあり、この地域が大きく変貌しようとする中で、日本の新たな役割が模索されるべき時期に来ているのではないで

しょうか。

ユーラシア大陸の中心に位置する中央アジアの安定と自立的発展は国際社会にとり重要であり、それは、国際社会の平和と安定に依存する日本の繁栄にとっても重要なものでもあります。日本は、ただいまご説明した外交政策を通じて、中央アジアの安定と発展を支える、いわば「公共財」の役割を、引き続き果たしていきたいと考えております。

### 3 おわりに

本日のシンポジウムは、このような中央アジアの「今」を、日本の皆様に知っていただくことを目的としております。

まず前半では、グローバルな観点から、中央アジア地域の地政学的な変化についてとりあげます。そして後半では、この地域が抱える共通の課題と、これへの対応について、日本との新たな協力の可能性を念頭に置きながら、とりあげてまいります。

最後に、本日の議論を通じて、日本と中央アジアの関係が、互いへの敬意に満ちた、より実りあるものとなることを祈念して、ご挨拶といたします。

ご清聴ありがとうございました。